

## 山家岩戸神楽

## 1. 山家岩戸神楽の来歴

岩戸神楽が伝えられる山家宝満宮は、祭神が玉依姫命、神宮皇后、応神天皇の三座から成り、宝満山に鎮座する竈門神社から勧請されたと思われる。同宮の棟札からその時期は、永正18年(1521)、施主は、当時筑紫満門の配下として山家庄を領有していた砥綿氏であったことが分かります。

一方、この神楽は「宮座」行事とセットになっていることが特徴です。『山家宝満宮御縁起』によれば、寛永9年(1632)の宮座成員の氏名、12組、24名が記されています。前述の『縁起』によれば、こうした宮座の原型は、天文年間(1532-1554)の後半には既にあったとされています。さらに、この「恒例の大祭」には、神輿の渡御や還御も行われ、祀官(神官)「二十余人」を擁して俗人による音楽や管弦を伴う行列もあったことが記されています。

しかし、この中に「神楽」の文字は見えません。では、現在、行われているような神楽は、当時はなかったのでしょうか。



山家宝満宮

## 2. 神楽の成立と改変

## ：その宗教的背景

この問題を考えるためには、神楽に対する我々の見方を再検討しなくてはなりません。今日、我々は神楽を「芸能」として考えています。それは、神官による祝詞を含めた祭式を終えた後で、神殿の前で神慮を慰めるために演じる芸態と捉えています。しかし、祭式



荒振神の舞

と神楽が明確に分離されたのは、明治初期であって、それ以前は祭式=神楽であったのです。山家神楽は、「命割」と称する近世期由来の演目表(祭文)を伝えていきます(明治36年・1903)。それには、1.神供 2.祝詞 3.敷詩 4.手草 5.天神 6.両刀 7.神舞 8.御弓 9.高処 10.四神 11.荒神 12.荒振神 13.事代 14.問答鬼 15.磯羅 16.天の岩戸 17.神相撲の17の演目が載せられていますが、このうち、13の演目が今日行われています。神供や祝詞で始まる一連の演目自体が、神楽が一種の「祈りの形式」であり、特定の目的を達成するための「儀礼」であったことを示しています。

このことは、山家神楽が所謂「社家神楽」、即ち舞い手が神職であったことから分かります。山家宝満宮の宮司は、歴代鶴崎家が担っています。『縁起』によれば、寛政11年(1799)の社司は、鶴崎上総守藤原要惟と明記されていますが、寛永9年(1632)のほうは「鶴崎姓…」とはっきりしません。この間に何があったのでしょうか。幕府が全国を対象にした宗教統制政策の一つとして「神社条目」、一般に「諸社禰宜神主等法度」と称される対神職政策を發布するのが、寛文5年(1665)です。以降、全国の神職の裁許(免許)は、京都の吉田家が一元的に与えることになり、神職の姓名に対する呼称も、それまでの「太夫」から「守」へと改められていきました。では、太夫時代の裁許は誰が与えていたかという、各地の

拠点的な山岳寺社や密教寺院でした。鶴崎氏の場合は、宝満山と見て間違いはないと思います。彼らが奉じた神道は、神仏習合に基づく「両部習合神道」、言わば密教的な神道でした。こうした中で、神楽という祭式が成立していったのですが、吉田神道に鞍替えして以降の神職らは、特に江戸時代中期以降、国学的思想が流布されるに連れて、神楽から仏教的要素（真言や経文）を消し、あるいは個々の演目の意味や解釈を「記紀神話」に沿ったものに改変していったのです。我々が今日見る神楽は、こうした改変を経た、あるいは改変途上のものであることに留意しなければなりません。明治の神仏分離以降、神職が神楽を舞うこと自体も禁止され（神職演舞禁止令）、そのまま民間に引き継がれたのです。



子どもを抱く荒振神

### 3. 「荒振神」の正体

北部九州では、豊前で約百ヶ所、筑前で約十三ヶ所と、同系統の神楽が密集していますが、それは両部神道の裁許主体であった多数の山岳寺社が連なっていたからです。山家神楽の場合は、宝満山（竈門社）がそれに当たるのですが、両部の太夫は内実共に山伏と変わるものではありません。演目のうち、「敷蒔」や「神相撲」のようなアクロバティックなものは当初からあったと思えます。また、「天の岩戸」は豊前・筑前を通して当初から

あり、記紀神話とも矛盾しないので最後に行われます。しかし、その前段に行われる「荒神（こうじん）」が神楽改変にあたって最も苦労した部分だと思われます。山家でも、「あらかみ」と読んだり、「荒振神」と転化したり、「問答鬼」と分化したり、あるいはその原型を「亀猛神」に位置づけたりと苦労しています。豊前では、専ら「駄仙（みさき）」と称していますが、この「鬼」は記紀神話には登場しません。この鬼の源流とされる中国地方の「荒平」は、天正16年（1588）の祭文で「そもそも荒平、御仏の前にて荒神となり、神の前にて御前（ミサキ）となる、有漏の凡夫の外道（鬼）となる…仏神ともに我なり」と述べているように、荒神＝駄仙＝鬼なのです。その語りの形式は、山伏問答の形式です。山家神楽では、荒振神とはなっているけれども問答形式はさらに明確です。

「そもそも荒振神といっぱ、火の形にて早く走ること翼あるが如し、しばしの間天地の内を走り廻り荒振神と語らいぞかし、」「我等の父の荒振神は、左の手に火を持ち右の手に水を持って東枕に打ち伏し給ふ」（『山家宝満宮岩戸神楽』山家神楽社）ここでは、荒神＝飛行＝火＝水というラインが強調されています。

荒平が持つ杖（しはんじょう）には、若返り＝再生の呪力が籠ることが最大の特徴です。豊前神楽でも、鬼杖（しかんじょう）や鈴にその呪力が期待されています。山家神楽では鈴を手にした鬼は、神殿に駆け上がり、その年に生まれた幼児を掲げて神に祈ります。豊前や筑前で何故に鬼が子供の人気者なのか、そこには深い理由がありそうです。

（白川琢磨）

#### 【参考文献】

白川琢磨「豊前神楽の系譜と改変」（『豊前神楽調査報告書』福岡県文化財調査研究委員会、2012）

白川琢磨「〈落差〉を解く－豊前神楽をめぐる歴史人類学的一解釈」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第132集、2006）